



Red Hat OpenShift Service on AWS 4

リリースノート

Red Hat OpenShift Service on AWS の主な新機能と変更点の

Red Hat OpenShift Service on AWS 4 リリースノート

Red Hat OpenShift Service on AWS の主な新機能と変更点の

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

法律上の通知

Copyright © 2022 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Release_notes.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

Red Hat OpenShift Service on AWS のリリースノートには、すべての新機能と拡張機能、注目すべき技術的変更、主要な修正、および一般公開時の既知問題についてまとめられています。

目次

第1章 RED HAT OPENSIFT SERVICE ON AWS 4.10 リリースノート	3
1.1. 本リリースについて	3
1.2. OPENSIFT CONTAINERPLATFORM の階層化された依存関係にあるコンポーネントのサポートと互換性	3
1.3. 新機能および機能拡張	3
1.3.1. 製品の機能拡張	3
1.3.2. ドキュメントの機能強化	4
1.4. 主な技術上の変更点	4
1.4.1. 暗号化されたエフェメラルインスタンスボリューム	4
1.4.2. ROSA CLI のスロットリングの改善	5
1.4.3. 新しいコマンドの追加	5
1.4.4. デフォルトの Pod ごとの PID 制限の引き上げ	5
1.5. 非推奨および削除された機能	5
1.5.1. ROSA STS 以外のデプロイメントモード	5
1.6. バグ修正	5
1.6.1. 既知の問題	5
1.6.2. 修正された問題	5

第1章 RED HAT OPENSIFT SERVICE ON AWS 4.10 リリース ノート

Red Hat OpenShift Service on AWS (ROSA) は、完全な管理対象型のターンキーアプリケーションプラットフォームで、アプリケーションを構築してデプロイすることでお客様に価値を提供することに集中できます。Red Hat および AWS Site Reliability Engineering (SRE) のエキスパートが基盤となるプラットフォームを管理するため、インフラストラクチャー管理の複雑さを心配する必要はありません。ROSA は、幅広い AWS コンピュート、データベース、分析、機械学習、ネットワーク、モバイル、およびその他のサービスとのシームレスな統合を提供し、差別化されたエクスペリエンスの構築とお客様への提供をさらに加速します。

1.1. 本リリースについて

Red Hat OpenShift Service on AWS [RHEA-2022:2252](#) が利用可能になりました。このリリースでは、CRI-O ランタイムで Kubernetes 1.24 を使用します。以下では、Red Hat OpenShift Service on AWS 4.10 に関連する新機能、変更、および既知の問題について説明します。

Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターは、<https://console.redhat.com/openshift> で入手できます。ROSA 用の Red Hat OpenShift Cluster Manager アプリケーションを使用すると、Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターをオンプレミスまたはクラウド環境にデプロイできます。

1.2. OPENSIFT CONTAINERPLATFORM の階層化された依存関係にあるコンポーネントのサポートと互換性

ROSA の階層化された依存コンポーネントのサポート範囲は、ROSA のバージョンとは関係なく変更されます。アドオンの現在のサポート状況と互換性を確認するには、[Red Hat OpenShift Service on AWS 更新ライフサイクル](#) を参照してください。

1.3. 新機能および機能拡張

1.3.1. 製品の機能拡張

次のリストでは、ROSA の主な機能について説明します。

- **ROSA UI ウィザード:** 新しい ROSA プロビジョニングウィザード UI が、AWS STS 専用のサービスとして利用できるようになりました。新しい UI ウィザードには、<https://console.redhat.com/openshift/create/rosa/wizard> からアクセスできます。
- **最新の CLI と新しい Operator:** ROSA コマンドラインインターフェイス (CLI) 1.1.11 が 2022 年 3 月 9 日にリリースされ、Red Hat OpenShift Service on AWS 4.10 クラスターの作成が可能になりました。最適な状態で使用できるように、常に最新の ROSA CLI を使用していることを確認してください。Red Hat OpenShift Service on AWS 4.10 には、新しい Operator とクラウドネットワーク設定コントローラーがあります。したがって、Red Hat OpenShift Service on AWS 4.10 にアップグレードすると、新しい Operator ロールとポリシーが追加されるか、新しいクラスターのデプロイメントに含まれます。Red Hat OpenShift Service on AWS 4.10 へのアップグレード中に、ROSA CLI で新しいロールとポリシーを追加するようにプロンプトが表示されます。
- **アップグレードの処理:** コマンド `rosa upgrade cluster` および `rosa upgrade account` ロールはシームレスで、過去の ROSA バージョンおよび Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターすべてと下位互換性があります。これらのコマンドを実行すると、以前のバージョンの Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターと、関連する STS ロールおよびポリシーが最新バージョンに更新されます。

- **ROSA UIをサポートする新しい AWS ロール: `ocm-role` と `user-role`** を管理し、ROSA プロビジョニング UI を使用するツールが、バージョン 1.2.0 の ROSA CLI で利用できるようになりました。また、**`ocm-role` と `user-role`** を使用すると、簡単に Red Hat OpenShift Cluster Manager UI のみから実行される ROSA STS アップグレードを行うことができます。

1.3.2. ドキュメントの機能強化

次のリストでは、ROSA の主要なドキュメント機能について説明します。

- **ROSA の開始:** Red Hat OpenShift Service on AWS 4.10 にスタートガイドが追加されました。ROSA のスタートガイドでは、基本的な用語を定義し、開発者と管理者向けにロールベースを使用した次の手順について説明します。チュートリアルでは、新しいユーザー向けに Web コンソールと Red Hat OpenShift Service on AWS CLI インターフェイスを使用しながらそれらについて詳しく説明します。新規ユーザーは、スタートガイドを使用すると次のタスクができるようになります。
 - 環境の設定
 - デフォルトのオプションを使用した STS での Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターの作成
 - クラスターにすぐアクセスできるようにクラスター管理者ユーザーの作成
 - アイデンティティプロバイダーの設定およびクラスターアクセスの付与
 - Web コンソールを使用したクラスターへのアクセス
 - Developer Catalog からのアプリケーションのデプロイ
 - 管理者権限とユーザーアクセスの取り消し
 - Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターおよび AWS STS リソースの削除

詳細は [Red Hat OpenShift Service on AWS のスタートガイド](#) を参照してください。

- **ドキュメントの再構成:** ROSA 製品ドキュメントは、次の内容をより直感的で明確かつ見つけやすくすることに重点を置き、2 段階に分けて構成をし直しました。
 - ナビゲーションメニュー
 - 本書の内容
 - トピックの流れ

さらに、ROSA ドキュメントでシームレスに異動できるように、リダイレクト機能が設定されました。

1.4. 主な技術上の変更点

Red Hat OpenShift Service on AWS 4.10 では、主に以下のような技術的な変更点を加えられています。

1.4.1. 暗号化されたエフェメラルインスタンスボリューム

2022 年 7 月以降に構築されたクラスターは、クラスター作成前のワークフローの一部として、暗号化されたエフェメラルインスタンスを使用します。これらのクラスターは、暗号化されたインスタンスボリュームのみを要求するサービスコントロールポリシー (SCP) を渡します。

1.4.2. ROSA CLI のスロットリングの改善

遅延、間隔、およびタイムアウトが改善され、AWS API に対処するときにリクエストがスロットルされる可能性が減少しました。

1.4.3. 新しいコマンドの追加

次のコマンドが追加されました。

- マネージドサービスまたはアプライアンスの管理: **rosa create|edit managed-service --id=<service> --parameter-key <parameter value>**
- Red Hat OpenShift Cluster Manager ロールの管理: **rosa create|list|delete ocm-role**
- Red Hat OpenShift Cluster Manager ユーザーの管理: **rosa create|list|delete user-role**

1.4.4. デフォルトの Pod ごとの PID 制限の引き上げ

Red Hat OpenShift Service on AWS バージョン 4.8.35、4.9.26、4.10.6 の時点で、Red Hat OpenShift Service on AWS のデフォルトの Pod ごとの PID 制限は **4096** です。この PID 制限を有効にする場合は、Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターをこれらのバージョン以降にアップグレードする必要があります。以前のバージョンの Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターでは、デフォルトの PID 制限である **1024** が使用されます。

1.5. 非推奨および削除された機能

以前のリリースで利用可能であった一部の機能が非推奨になるか、または削除されました。非推奨の機能は依然として ROSA に含まれており、引き続きサポートされますが、本製品の今後のリリースで削除されるため、新規デプロイメントでの使用は推奨されません。

1.5.1. ROSA STS 以外のデプロイメントモード

ROSA STS 以外のデプロイメントモードは、新規クラスター向けの推奨の手法ではなくなりました。代わりに、STS モードで ROSA をデプロイする必要があります。<https://console.redhat.com/openshift/create/rosa/wizard> の新たな ROSA プロビジョニングウィザードの UI サービスが導入されたことで、今回この機能が非推奨になりました。

1.6. バグ修正

1.6.1. 既知の問題

- ROSA プロビジョニングウィザードで重要な **ocm-role** と **user-role** は、Red Hat 組織の別のユーザーによって誤って有効にされる可能性があります。ただし、有効にしてもユーザービリティには影響しません。
- **htpasswd** ID プロバイダーは、**rosa create admin** 機能に対するすべてのシナリオで想定どおりに機能しません。この問題は、今後リリースされる新しいバージョンの ROSA CLI で解決される予定です。

1.6.2. 修正された問題

- 以前のリリースでは、Red Hat OpenShift Service on AWS クラスターにシングル AZ モードを選択した場合に、複数のアベイラビリティゾーンも選択できました。この問題は修正され、

Single-AZ モードを選択したときに指定できるアベイラビリティゾーンが1つだけになりました。